

# 子どもの「虫殺し」

飛田裕美

はさみ虫は、園舎と垣根の間の薄暗く  
てはじめた所にいます。堆肥にするべ  
く積まれた、落葉が腐りかけている土を少  
し掘ると、ごそごそと逃げようとする小  
さな虫達の姿が現われます。その中で、黒光  
りする細長い胴体と、おしりの先にはさみ  
を持ち、つかまえようとすると、そのはさ  
みを振りかざして抵抗する手強い虫が、は  
さみ虫です。色鮮かな蝶やてんとう虫、ユ  
ニークなカタツムリなどの、以前はよく見

られた虫が少なくなってきた今日、はさみ  
虫は虫取りをする子どもにとって、スター  
的存在のひとつです。朝、ビニール袋を持  
ってその場所に駆け付け、帰りには、その  
袋の中に腐葉土と大小様々なはさみ虫をた  
っぷり持って行く子どもが、毎日絶えませ  
ん。  
子どもは、はさみ虫を可愛がって育てよ  
うとか、一緒に遊ぼうなどと考えて取るわ  
けではありません。目的などどうでもいい

のです。はさみを振りかざして抵抗する虫  
を、時には逃げられ、時には指を痛めつけ  
られながらも、自分の手の中につかみ込む  
瞬間、そしてその虫を袋の中に入れ、自由  
を奪った時に、征服者のような快感があるのだ  
と思います。つかまえた虫は、生かすも殺  
すも、子どもの思いのままなのです。

ある時、年長男児のRとYは、地面の上  
に這う小さな虫を見つけました。Rが「な  
んだらう、これ」と、踏もうとすると、Y  
は「やめろよ。たたりがあるぞ」と言い、  
少し離れます。それでもRは、その虫を踏  
みつぶしてしまいました。

Rにとってその虫は、Rの心に湧き起こ  
った好奇心や探求心、あるいはふとした衝  
動を満足させるための対象として見えたと  
思われます。これに対してYには、魂のあ  
るひとつの生命と感じられたのだと思いま  
すが、その魂への畏れは、Rには通じなか

ったのです。

子どもを見ていると、「かわいそう」と言っても通じない、Rのような行為はしづらい見られ、思いがけないその残酷さに驚くことがあります。これは、昔話の『浦島太郎』などのモチーフ（子どもが生き物をいじめ、それを見てかわいそうに思った大人が、代償を払ってその生き物を救う）にも見られることから、子どもと大人の特徴的な姿と考えられます。だから大人としては、Yの態度に共感するのです。しかし、自分の幼年時代を振り返って、Rのように沢山の虫を殺し、そこに快感のようなものを味わってきたことを思い起こす大人は、少なくないと思います。そしていつか虫殺しをやめる時が来ることは、体験から明らかだと思えます。このことから、虫殺しの体験を経て、生命尊重の価値観や道徳を身につけ、残酷な衝動を抑圧するようになって行くという成長の過程が思い浮かびま

す。しかし、この衝動が消えたとは言いません。

さわやかな風が若葉を揺らす五月は、毛虫の季節でもあります。四月には花びら集めて賑わった桜の木の下は、この頃、毛虫退治で再び賑わうのです。始めは恐る／＼毛虫を眺めていた子どもでも、ちょっと足伸ばして踏んでみたり、棒で突いてみたり……。毛虫を集める子どももいます。次々につかまえた毛虫を、地面に並べて同じ方向に進ませ、ゴールラインまで来るのを待ちます。そしてゴールインすると、足でベシヤ。ゴールインしないものも、ベシヤ。結局、辺りはつぶれた毛虫だけになってしまふのです。

害虫の毛虫を退治しながら、いつしか楽しんでる子どもの姿は、やはり残酷に感じられます。しかし、やり方はどうであれ、大人の毛虫退治の結果だって同じこと

なのです。子どものように、残酷な衝動をストレートに表わさないにしても、大人の心のどこかでは、残酷な衝動を名目の中に合理的に処理しているのではないでしょう。その衝動は、成長するにつれて、意識によって抑圧され、忘れられてきてはいるけれども、やはり心の中に存在しているのです。

虫を殺している子どもを見て、その衝動と同じものが自分にも内在していることを思い出す時、子どもと共感できる部分が見つかるとような気がします。そして、時には、成長と共に忘れていた内なる世界に目を向け、子どもとの共有世界を広げることが必要な、と思うのです。

（東京・まんとみ幼稚園）